緑爽会会報　No. 186

2023年6月26日発行
日本山岳会　緑爽会
発行人　荒井正人

デザイン・制作　関塚貞亨

〜〜《報告》〜〜

5月山行報告　南高尾山稜

荒井 正人

実施日：5 月 12 日（金）　　　　参加者：11 名（写真参照）

昨年の 5 月山行は中央線の上野原北方に位置する「八重山〜能岳」で、キンランをはじめ、多くの花に巡り逢えた。今年は開花が 2 週間ほど早いとの声があるが、違うエリアで再びキンランに逢いに行こうと考えた。南高尾山稜を標高の高い大垂水峠から辿るプランである。議案書にも載せたかったので日程は早くに決めたが、それが「遅かった！」などとなりはしないかと心配で仕方がなかった。

前日には雷と強い雨が降ったが、幸い好天となった。それでも滑りやすい場所もあり、足の置き場所に注意が必要である。峠からすぐ、沢が崩れた所があり、工事現場のような手摺も利用して一旦下り、登り返して稜線に出る。鶯の鳴き声を耳に、ゆるゆると登れば最初のピーク「大洞山」。そこから枝を加工した「リュック掛け」のある盛り上がりが「コンピラ山」で、ここまで約 1 時間。

山道が左右二本ある下りに差しかかり、少しでも滑らない感じの右を行けば、何と下り着く直前にキンランが咲いているではないか！心の中で「やった！」と思った。後続も「こんな道の脇に、よく踏まれずに」と最初の出逢いにカメラを向ける。すでにウツギなどいくつかの花には出逢えていたが、やはりキンランが見られるかもしれないと企画しただけに、ややホッとする。

この山稜はいくつも瘤があるが、「まきみち」表示もあり、あまり無理せず利用していく。最初の「まきみち」らしき、表示の無い分岐を右に行った 3 人と別れてしまったが、どうもまきみちではないような気がして稜線で待つことにした。やはり下り道だったようだと戻ってきた。これで少し学んだ。とはいえ初めて歩くからと、栗城さんはずっと尾根通しで歩いていた。中沢山も巻いたが、山頂には山ツツジとシランがあったと教えてくれた。

このルートで一番の展望は、南側が見渡せ、眼下には相模川が、奥には丹沢山塊が見える地点で、どうぞお休みくださいとばかりにベンチが長く連なっている。ここでコンロを使ってコーヒーなどを淹れられたら良いのだろうが、登山道の脇であり、そう広いわけではないので、ちょいと休むだけである。ここはいつもガスがかかっていたが、3 回目にして初めて景色を眺めることが出来た。それは

目　次

ページ
《報告》
1. 5月山行報告　南高尾山稜
3. 南高尾を歩く　中村 好至惠
5. （続）芳賀さんのお話を聞く会

《寄稿・投稿》
6. 最近の「緑爽会会報」から　小原 茂延
7. 〝より高く、より困難を求めて60年〟　髙橋 清輝
9. 山岳会設立の頃〈２０世紀初頭の東京〉❸❹　南川 金一

《ようこそルームへ》
11. チョウのモニタリング調査　石塚 嘉一

《予告など》
12. 編集後記・次号予告

《別冊》天国からのラブレター
さようなら　石原國利さん、
有難うございました　近藤 緑

嬉しかったのだが、この先でツレサギソウを見たことがあり、キンランと並んで今日の目玉として考えていた。そんなことで、気もそぞろで先を急いだ。確か左側（山側）の斜面にあったと記憶していたので、目を皿のようにして進んでいくが、見当たらないままに、もうこんなところではなかった、という地点まで行ってしまった。

西山峠の手前に少し開けたベンチのある場所があり、そこで昼食とした。ここには倒木を利用した大きな龍の彫り物が横たわっている。食べていると黒いチョウが舞っているのが見えた。石塚さんに何という名前か教えを請うと、モンキアゲハだということで、確かに黄色の（白くも見えたが）紋が印象的で、写真を撮ろうとするが動きが早くてうまく行かない。それでもさすがに石塚さんはしっかり撮っていた。ミスジチョウも飛んでいた。腰を上げて記念写真をと思ったちょうどその時、女性二人連れが来られたのでシャッターを押していただいた。何と日本山岳会の千葉支部所属と仰る。松田支部長ですねと言うと、先日も房総ＢＣに行ってきましたと話された。ここで緑爽会のしおりをお渡し出来たら良かったのだが、残念なことに誰も持っていなかった！ 反省。

一歩きで三沢峠となり、ここから下る組と、草戸山を越えてから下る組とに分かれ、サブの石塚さんには下山組に同行していただいた。いくつかアップダウンを繰り返し、途中の少し開けた場所からは遠くでも目立つジャケツイバラの鮮やかな黄色を眺め、草戸山頂の山の神に手を合わせてから梅ノ木平へと下った。こんなに急だったかなと思うロープを掴んでの下りしばしで、林道に出ると、何やら人の声が。何と島田さん、大島さんとピッタリのタイミングで合流したのだった。たぶん調整していただいたのだろう。かくして車道に出て、残り 1.6ｋｍの舗装路を高尾山口駅へと歩いて、一旦解散とした。唯一残念だったのは、ツレサギソウが見られなかったことだった。

左から：石塚嘉一、荒井正人、竹中彰、小清水敏昌、小林敏博、富澤克禮、中村好至惠、栗城幸二
大島洋子、鳥橋祥子、島田稔　（この後方の緑の中でモンキアゲハが長いこと舞っていた）

南高尾を歩く

中村 好至惠

5 月 12 日（金）前日の急な雷雨の天候急変から明けて当日は好天に恵まれ、総勢 11 名にて元気に南高尾山稜を歩きました。相模湖駅から 8：39 発のバス乗車、大垂水峠で下車するとすぐに歩道橋なので、取り敢えずその歩道橋上でリーダーの荒井代表から歩き始める前のミーティングが行われました。

先頭を行く荒井リーダー、最初はすれ違いもままならない山道なのでどんどん進みます。隊列中程を歩いていた筆者ですが、歩き始めてまもなく出会うマルバウツギの純白の花、同じアジサイ科のガクウツギ、そしてハンショウヅルにまで出会って少しずつ遅れます。が、先頭集団は休むことなくそれ以降もグングンと歩を進め、最初の分岐で巻道組と直登組が分かれるまで、そのままの歩調。

ガクウツギ

ここは最初のピーク大洞山で、地図上に巻道記載のある中沢山はまだまだ先です。内心ここで隊を二分してよかったのか…と思いながらも直登した山頂には程よいスペースがあり休憩タイムとなりました。しかし、そこで巻いた 3 人とこのままでは地形的にも出会いそうがないと気づき、慌てて携帯での連絡にて呼び戻し作戦となったのです。が、下を歩いていた 3 人もすぐに間違いに気づき、来た道を戻っていて事なきを得ますが、ここでの待ち時間が思い返せば当日の（昼食時を除いた）最大休憩でした。（但し、戻り返した 3 人は大した休憩もなく、すぐに出発でしたが…。）

この南高尾山稜は緩やかなそこそこのアップダウンを伴う樹林帯のなかの縦走路で、展望こそあまり期待できませんが、植物も豊富で植生や樹林を観察しながら、どちらかと言えばゆっくりペースで歩を進めるのが最適なコースのように思えますが、しかし当日は違いました。

リーダーは最初に「今日はキンランが見られると思うんですが…」と嬉しい情報も提供していて、実際それは見事に的中で、縦走路各所にて美しいキンラン、そしてギンランやエビネまでも出会うことが出来ました。そんな事前の花情報があっても、歩は早かった…。隊列は自然と前後に分かれ、後続グループでは花の写真を撮ったり、アマドコロとナルコユリの区別を観察したり、富澤さんの豊富な知識や石塚さんの楽しいコメント、小林さんのツッコミなどで和気あいあいと進んでいくのでした。

そしてその日唯一の展望場所、中沢山を通過して暫く行ったベンチ地点、南の相模川を挟んだ丹沢方面が見通せる場所に到着しました。（右写真）生憎、丹沢の主稜である焼山から続く蛭ヶ岳への稜線は雲に隠れて見えませんでしたが、左手端に

はピラミダルな大山、その隣に深くヤビツ峠をはさんで二ノ塔を左肩に乗せた三ノ塔がシルエットで見えました。そして一番近くに見える三角錐は、向こう側からスケッチした事があり形を覚えていた仙洞寺山と気づきます。いつもの感覚と裏側から見ているので錯覚しますが、だんだんと眺望に慣れてくると、影になって見えないけれど仙洞寺山の奥には宮ヶ瀬湖があり、とすると平らな稜線は湖畔の南山か…と山座同定が面白くなります。

と、すでにリーダーは出発し始めているではないですか。「エッ！もう？」　ここで休憩するんじゃないの？…と内心、もしかしたら小さなスケッチ一枚くらいは描けるかと期待したのも虚しく、隣ではザックを置いて飲み物を口にしていた小林さんも「え！行くの？」と慌てています。後続部隊は「ここで休まなければ何処で休む？」と云った雰囲気で、渋々とザックを担ぎ出発しました。

しかしそのうち他にも「お腹空いてきましたね～、朝早かったし」との声も漏れ聞こえてきて、一体どこで休むのだろうか…と隊列全体が思い始めた頃、西山峠に行き着く手前のベンチのある広場でやっと、本日初めての本当の休憩となりました。みなさん、お疲れ様です。

モンキアゲハ

30 分ほどの昼食休憩後、ここで集合写真を撮りましょうと集まっている丁度その時、二人連れの女性が登って来たのでシャッターをお願いしました。片方の方が手慣れた様子で撮影してくださり、カメラの持ち主の石塚さんがお礼がてら「私たちは日本山岳会です」と伝えると、なんと！その方が「私は千葉支部です」と。そこで一気に奇遇を喜び合い、後で歩きながら「緑爽会ですって一言、作ったばかりの案内栞をこういう時に宣伝で手渡せばよかったのに～」とひとしきり盛り上がったのですが、誰も栞は持参していませんでした。

さて、後半も先行している荒井リーダーは、ふと立ち止まって待っているかと思うと「そこ！そこ！」とこちらの足元を指差し、何か在ると指示。見ればきれいにオカタツナミソウが群生して、透明な空のような青い色を放っています。満足気なリーダーは、すると又すぐに出発しているではありませんか。最後までピッタリとリーダーに付いて行かれる島田さん始め大先輩の方々を脱帽の思いで見送ります。

オカタツナミソウ

そして最後の三沢峠まで来ると、そこから沢沿いに下る組と、草戸山経由で下山する組とに分かれ下山開始。稜線組は草戸峠先の斜めに下る経路に入り、沢筋の林道に飛び出すことになっていましたが、これまた驚きで、示し合わせたようにピッタリと沢筋下山組と降りた地点で出合ったのです。総勢 11 名はその後、林道と甲州街道を辿り全員無事に下山し、高尾 599 ミュージアムにてトイレ休憩後解散。有志は高尾駅まで出ての反省会でしたが、長距離のわりにハイペースの山行だったため、午後 3 時には最寄りの店にて早くも祝杯を上げたのでした。

（写真提供：中村好至惠、石塚嘉一、荒井正人）

続・芳賀さんのお話を聞く会

前号では、神﨑さんからの質問で、三田幸夫の人柄について語られたところまで掲載しました。その後、山口節子さん、スケッチクラブの小出和子さんから思い出話などが語られた後、平野紀子さんから「長蔵小屋の宿帳が大正 12 年からあるが、昭和 25 年に、槙さんと三田さんが並んで署名されている」と話されたことで、芳賀さんから「槙さんについて面白い話があるので紹介しましょう」と言ってこんな話を話していただきました。

神奈川県茅ケ崎に住んでいた頃のことです。日本山岳会の集会、年次晩餐会の折、「槙さんのお帰りにお供するように」と加藤泰安先輩に言われて槙さんと茅ヶ崎までご一緒した。私はその時初めて湘南電車のグリーン車に乗った。緊張していたが車中での槙さんのお話はいつも愉快で楽しかった。

ある時「君は札幌出身ならば北大の大野精七先生を知っているか」と聞かれたので、「よく存じています」と答えた。すると槙さんが「じゃあこれから話すことを大野先生に伝えてくれ」と。

槙さんは 1921（大正 10）年、アイガー東山稜の初登攀に成功した。日本の登山家としての槙有恒がヨーロッパ登山界に初めて認められた。この頃、槙さんはスイス滞在中であった。ドイツ留学中の大野先生から手紙を受け取った。その内容はクリスマス休暇にスイスに行き、槙さんとスキーを楽しみたいとのことであった。しばらくすると、もう一人の友人、パリのソルボンヌ留学中の藤島敏男氏から大野先生と同じような内容の手紙を受け取った。槙さんは、早速二人の友人へスイス・サンモリッツスキー場でお会いしましょうと連絡した。それが実現した日のこと。

コースを見上げていると、さえない服装のスキーヤーが槙さんのところへやって来た。その人は大野先生であったが、槙さんにこう話した。「先ほどゲレンデでベレー帽を被り恰好よくマフラーを首に巻いた日本人スキーヤーに会ったので声を掛けた。すると私を見て、何かわからないフランス語でまくしたてられた。」と。今度はベレー帽とマフラー姿の藤島氏が目の前に現れて、「ゲレンデで、日本人と思われるスキーヤーに出会った。その服装は昔の煙筒掃除夫が被るような帽子に、腰には日本手ぬぐいを下げていた。国際スキー場に合わないスタイルなのでフランス語で追いやった」と話した。

槙さんは二人の話を聞いて、これは面白いことが展開すると頭に浮かんだ。ホテルに帰ると二人に電話をした。「今晩は私がご馳走するので私のホテルに来るように」と連絡した。すると二人はホテルにやって来て向かい合わせにセットされた席についた。その途端二人はお互いに顔をそむけた。槙さんは簡単に二人の名前を知らせた。しばらくの沈黙が続いたので槙さんは「今日は私の招待なので遠慮なく召し上がってください」と言った。槙さんは二人の困惑したしぐさを面白く見ていたが、しばらくして二人にこう話しかけた。

「慶応の同窓は直ぐに挨拶を交わしますが、一高・東大卒の人は、初対面の場合は顔を合わせて

も挨拶をしない風習ですか」と切り出した。
　するとおもむろに大野先生が「私は東大医学部 1918（大正 7）年卒業で現在ドイツ・フライブルグ大学に留学中です。1924 年帰国予定でその後は北大医学部に赴任する予定です」と自己紹介した。すると藤島氏は「私も一高・東大で法学部 1921（大正 10）年卒業、その後日本銀行へ入行しました。現在パリ大学ソルボンヌに留学中です。大野さんは私の先輩です。大変失礼しました」と言って頭をさげた。
　「槇さんが、このように人をいじめ、困惑とみじめな様子を見て楽しまれる趣味を持っているとは知らなかった」と藤島氏は、槇さんに一本取られたことを嘆いていた。その後は楽しく夕食を過ごした。
　翌年の夏、私が札幌へ出張した際、札幌医大へ大野先生に面会したい旨を連絡したところ、大野先生と名誉学長室でお会いすることになった。先生にお会いすると「槇さんのお話とはなんですか」と率直に聞かれた。私は槇さんのサンモリッツスキー場でのお話を忠実に伝えた。先生は初め渋いお顔をして聞いていらしたがやがて笑顔になり「槇さんは人を困らせて喜ぶ趣味を持った人です」と言って笑われた。「よくぞ貴重な話を伝えてくれた」とお礼の言葉があった。私は槇さんの伝言の責任を果たし、解放された気持ちで部屋を後にした。
　その年の年次晩餐会の席で槇さんにお会いした。槇さんは「君がちゃんと伝えられるか試したんだよ」と、どこまでも人をいじめるのが好きな槇さんだった。

実施日：2023 年 2 月 24 日
参加者：山口節子、田村佐喜子、神﨑忠男、梨羽時春、松本恒廣、近藤緑、吉田理一、渡部温子、川嶋新太郎、平野紀子、鳥橋祥子、大島洋子、島田稔、富澤克禮、山川陽一、竹中彰、渡邊貞信、石塚嘉一、荒井正人、横関邦子、相良泰子、藤下美穂子、小林敏博（以上は緑爽会 23 名）、他にスケッチクラブの芳賀淳子さんと小出和子さん、松澤由紀子さん
（前号で参加者名などを漏らしました。お詫びし、ここに掲載いたします。記録：荒井正人）

～～《寄稿/投稿》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

最近の「緑爽会会報」から

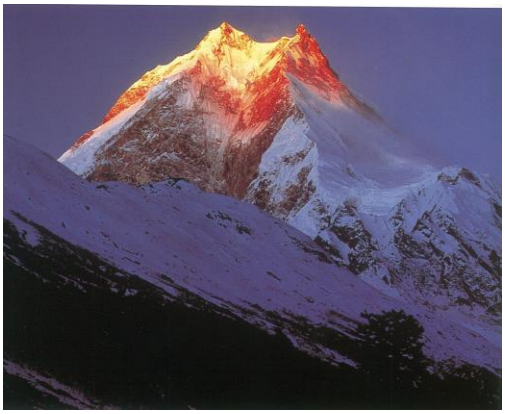
小原 茂延

　昨春以来、持病の間質性肺炎が悪化して酸素吸入での生活を余儀なくされ、山岳会の活動は殆どできず、支部の同好会である「彩の山研究会」の継続が精一杯で、偶に講演会へも出掛けて見たが、ザックに背負った酸素ボンベの吸入音が迷惑になるような気兼ねもあって閉じ籠りの日々を続けていた。ところが何と丁度１年にして酸素吸入とステロイド療法が改善効果を示して酸素チューブを外せたのはありがたかった。
　関塚さんが本年 2 月号に「緑爽会創設の頃の会員の想い出(1)」で織内信彦さん、國見利夫さんについて書かれていて、緑爽会初代代表の國見さんの『山岳』追悼は通常の追悼欄の扱いではなく、亡くなられる１年半ほど前に緑爽会で講演した「山脈・人脈―歩いてきたみち」が掲載されたという。小生は日本山岳会に入る前より、ホームページから緑爽会の会報を読んでおり、その講演録が載った 114 号（2012 年 12 月、2013 年 1 月合併号）に記憶があった。アーカイブで確認すると正に同文であるが 7Ｐの終り辺りに 2005 年、肺気腫に倒れてから 7 年になるとの記述がある。添付の写

真(2P)に講演時の写真が掲載されているが、酸素吸入をされているようであり、相似た闘病をされていたことを知った。なお、同写真を撮影された小泉義彦氏がこの 4 月 1 日に亡くなられており、緑爽会入会当初よりお世話になり、数人グループで山談会を楽しんだ小泉さんの在りし日を偲んだ。

國見さんを偲んで元副会長の神﨑忠男さんが「会報・山」836 号に書いているように國見さんは衆議院山岳会に属していて、いわゆる職域山岳会で活躍の後 1961 年に JAC 入会という経歴を持ち、日本山岳協会で斎藤一男会長体制において正規職員として事務局長に就任しており主として自然保護担当であった由、その後、田部井淳子さんの要請もあって日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト(HAT-J)の初代事務局長に就任されている。

先述の國見さんの講演録の最後の辺りで、「実際の登山では、2000 年に緑爽会の大山恭司さんと梅本知榮子さんが元老の織内信彦さんと準元老として私の二人を車で、立山室堂、剱の馬場島に案内してくれたことが忘れられない。・・・」と晩年の立山・剱行で後輩の配慮に感謝していて、その人柄を想像することができた。



大山恭司さんは「日本山岳会百年史」の巻頭の写真『黎明のマナスル』の撮影者であり、梅本(旧姓漆原)知榮子さんは 1970 年の「アンナプルナ日本女子登山隊」で撮影担当として遠征に参加している。小生が緑爽会に入った 2014 年にはお二方とも緑爽会には居られなかったようであるが、梅本さんとは埼玉支部で一緒だったので、支部同好会の「陸地測量部」で三角点探訪などで故遠山元信氏(山遊会初代会長、山岳地理クラブ、資料映像委員会)と調査を共にした他、最近も私共の「山談会」にもゲストで来て頂いている。女史は、「東京岳人倶楽部」に属していて例年文京シビックセンターで作品展を開催している他、東京都美術館で開催の「日本山岳写真協会展」にも出品が多年に亘っている。

〝より高く、より困難を求めて６０年〟

髙橋 清輝

「緑爽会」の仲間に加えていただき光栄に存じます。

名刺代わりに自己紹介いたします。

昭和 17 年仙台で生まれ、昨年傘寿を迎えました。実家は閖上(ゆりあげ)（現・名取市）で、東日本大震災に遭遇。父親の転勤に伴い仙台、古川、白河に移り、中学 2 年で単独で上京。山好きな担任の影響もあり南アルプス白峰三山縦走から登山活動開始。高校進学後、山岳部で穂高や積雪期の八ヶ岳に登る。早稲田大学に進み、東洋哲学を専攻。山岳部入部を望んだが、当時遭難事故が相次ぎ、休部状態が続いたため断念。高校 OB や社会人山岳会で技術研鑽を積む。

大学卒業後、立川女子高校に社会科（倫理）教諭として奉職。以降、

教頭を経て校長職を 11 年間務めて退職。この間、同校山岳部顧問として 54 年間、女子高校生を引率して海外遠征 13 回、インターハイ登山大会（全国大会優勝 2 回）、都大会では 23 回連続優勝等の実績を挙げた。

クラブのテーマは「より高く、より困難を求めて」で、目標達成はパーティ全員の力の結集により実現される、という認識を持つべきで「山は素晴らしい教室」と位置づけ、そのため心することは、チームワーク、メンバーシップの大切さ、ルート工作、荷揚げの分担、リーダーの役割と責任、各係の専門知識と分担等のパートの責任も重要。だからこそ、パーティ登山にヒロイン、ヒーロー不要論が私の持論です。特に極地法という登山形式でのサミッターは全隊員に感謝すべきとし、山イコール自然は、人間の力を超えた偉大な教育者であり、山登りを通して人間本来の性質が呼びさまされ淘汰される。山は人間にとって価値の高い教育の場となり得る、というのが私の体験を通しての理念です。

アメリカ合衆国ＩＯＮＤ大学より教育、冒険の功績を評価され、名誉博士の称号を、雑誌「mono」よりアウトドア人間国宝第一号に認定された。平成 8 年に都民文化栄誉賞を受賞、30 年に瑞宝小綬章の栄誉を受けた。日山協海外委員、都岳連役員、全国・関東・東京高体連の役員、委員長、審判長を歴任、東京都、立川市、私学協会及び日山協、都岳連、高体連から特別功労賞の表彰を受けた。

東京多摩支部創立時にメンバーになり、幹事、副支部長を務めた。著書に「ヒマラヤ・素晴らしき教室」「女子高生・汗と涙の初登頂」「より高く、より困難を求めて」等。テレビ・ラジオ出演 50 本以上、講演 800 回を超える。

◎立川女子高校山岳部登山隊長としての海外遠征記録

◇第一次（昭和 47 年）世界初の高校生による海外遠征を実施。台湾・玉山主峰・北峰登頂成功

◇第二次（昭和 50 年）韓国、雪岳山に登頂成功

◇第三次（昭和 53～54 年）世界で初の高校生によるヒマラヤ遠征を企て、ネパールヒマラヤ・ゴーキョピーク登頂成功

◇第四次（昭和 57 年）カナダロッキー・ツインズ北峰登頂成功

◇第五次（平成元年）ネパールヒマラヤ・チュルー南東峰にドイツ隊に次いで世界第二登

◇第六次（平成 4 年）アメリカ合衆国、アラスカ・サンフォード遠征。頂上直下で猛吹雪に遭遇、登頂断念。

◇第七次（平成 7 年）中国、パミール・コングールⅣ峰（6650m）世界初登頂

◇第八次（平成 21 年）ネパールヒマラヤ・ダンプスピーク登頂成功

◇第九次（平成 30 年）ボルネオ・キナバル遠征。暴風雨でアタック禁止令が出て断念

◎世界青少年交流登山に日本代表として 3 回出場（韓国、ネパール、パキスタン）

◎東京高校体育連盟顧問登山隊隊長としてインド・ザンスカール登頂成功（昭和 61 年）

教育に携わり 50 年、登山活動は 65 年。非力ながら自分らしく精一杯、ひと筋に頑張ってきたつもりです。特に生徒と歩んだその絆は何よりも私の人生の宝となりました。

山岳会設立の頃〈20 世紀初頭の東京〉❸

甲武鉄道飯田町駅と東京市内の鉄道

南川 金一

山岳会設立間もない頃の山の紀行文を読むと、中央線方面の山へ行く時は飯田町停車場（No.184 の本稿添付の地図③）から乗車している。甲武鉄道は明治 22 年４月新宿～立川間が、同年８月立川～八王子間が開通した。甲武鉄道の市街線として、新宿～飯田町間が明治 28 年開通した。したがって、立川、八王子方面へ行くには飯田町が始発だった。八王子から西へは国有鉄道の中央線が明治 36 年甲府まで通じた。その頃について、『明治の山旅』（武田久吉）の「明治 38 年」の「甲斐の権現岳」の章には「２年前の明治 36 年に、甲斐の駒ケ岳に赴いた時には中央線は甲府までしか開通していなかったが、この度は富士見まで伸びていることとて、八ヶ岳に登るには日野春で下車すればよいわけである」「始発駅飯田町を出た甲武鉄道の一番列車は…」「汽車はいつしか多摩川の鉄橋を渡って八王子に着く。…ここは甲武鉄道の終点であるゆえ、…急ぎ支度をして、…中央線の客車に移った」とあって、八王子で甲武鉄道から国有鉄道に乗り換えている。大正元年の木暮理太郎の奥秩父行の紀行文には「午後九時飯田町発名古屋行の列車に乗って…」「午前四時十五分塩山着」（『山の想い出』）と書いていて、その頃には飯田町～名古屋間の夜行があった。

甲武鉄道は同じ線路上を汽車と電車が走った。市街線は 1904（明治 37）年８月飯田町～中野間の電車運転を開業、同年 12 月 31 日飯田町～御茶ノ水間が開業した。それは、万世橋を経て、当時工事が進んでいた中央停車場（東京駅）まで延長する計画であった。飯田町停車場は、現在の飯田橋駅と水道橋駅の間の神田川に沿う位置にあり、神田川に沿って線路を延長すれば、水道橋であり、御茶ノ水だった。現在の飯田橋駅西口の少し西寄りに牛込停車場（No.184 の本稿添付地図の④）があり、飯田町停車場との距離は 800㍍ほど。関東大震災後、新宿～飯田橋の複線化工事完成を機に、合併して飯田橋駅となった。先日、飯田橋駅で下車する際、市ヶ谷寄りで電車を降りた。以前はホームがカーブしていて、見通しが悪く危険だったため、ホームを西側に伸ばしたので西端はかなり市ヶ谷寄りになり、昔の牛込停車場はその辺りだったのではないかと思われた。

『東京案内』という本がある。東京市の編纂になるもので、明治 40 年４月刊行。芝区内の汽車について「本区における鉄道は、新橋より品川に至る東海道線あり。…品川停車場は東海道の第二駅にして、帝都南界の乗降所とす。又山手鉄道の分岐点に当たり、上野、新宿、赤羽方面に向かうものの乗換所なり。…ほかに高架鉄道市街線あり。芝新銭座町より東海道線を承けて、麹町区永楽町に至り、此処に中央停車場を開く筈。開通予定は明治 43 年３月なりと云う」との説明がある。

鉄道は、官営鉄道と民間資本によるものがあった。1872（明治５）年５月官営による品川～横浜間、同年９月新橋（汐留）～横浜間が開通した。1883（明治 16）年日本鉄道による上野～熊谷間が開通、翌年には高崎まで延長された。1885（明治 18）年日本鉄道の品川―新宿―池袋―赤羽間が開通、また、1903（明治 36）年には池袋～田端間が開通したので、都心の新橋と上野を繋ぐ鉄道が急務だった。高架鉄道とは新永間市街線とも呼ばれた。新銭座町～永楽町間を高架で結び、中央停車場を設けるというもの。新銭座町とは今の浜松町あたり、永楽町とは今の大手町あたりで、中央停車場は東京駅である。完成した高架鉄道が、現在の浜松町から神田あたりへと続く高架線である。新永間市街線は 1909（明治 42）年 12 月品川から浜松町を経由し、烏森（現在の新橋駅）までの間の電車線が複線で開業した。翌年６月烏森～有楽町間が、同年９月呉服橋仮停車場まで延長開業した。東京駅の開業は 1914（大正３）年である。

山岳会設立の頃〈20 世紀初頭の東京〉❹

優雅な旦那・高頭仁兵衛のこと

南川 金一

山岳会に財政的な援助をするという高頭仁兵衛の話に、発起人に名を連ねることになる皆は大いに喜んだが、「その話を信じてよいのか」と慎重だったのは城数馬で、身元を調べるために新潟へ高頭を訪ねた。弁護士であるから、裏付けを取っておかなければと考えるのは当然である。

山岳会設立に当り、「毎年千円を向こう十年間提供」が当初の約束だった。しかし、百年史の編纂中に、図書室に保管されている合本していない『山岳』を調べていたところ、一枚刷りの会計報告書が挟まっていた。大正 12 年度と大正 13 年度の収支が載っており、大正 12 年度の収入之部に「寄附金一、〇〇〇円」の記載がある。大正 13 年度の方にはその記載はない。また、大正 15 年度（昭和元年）のものも見付かったが、その記載はない。高頭からの寄付は大正 12 年度まで、18 年間続いたらしいと判明したのだった。山岳会が存続し得たのは、高頭仁兵衛のおかげである。

高頭家は越後国三島郡深澤村の旧家であり、家系図がないので、仁兵衛家がどのような位置付けになるのかははっきりしないが、大地主であった。『新潟県史』に載る「戦前の大土地所有統計」によれば、高頭仁兵衛家所有の田畑は、明治 34 年 141 町歩、大正 13 年 109 町歩、昭和 19 年 74 町歩で、明治末では三島郡でも五指に入る地主だった。高頭仁兵衛が自分の生い立ちを書いた『御国の咄　自叙伝』では、二十歳で仁兵衛を継承して翌年に結婚、爾来 30 年の間に「しばしば土地や、書画骨董を売却いたしました」「とにかくも、祖先から受けつぎました財産を浪費いたしました事は全く事実でありまする」と書き、それは『日本山嶽志』と『日本太陽暦年表』のためだったと認めているが、その一部は山岳会のためでもあったことは間違いないだろう。

二十歳で家督を継いだとはいえ、旦那ぶりは相当なものだった。家業の一切は弟の得次郎と番頭の山崎彦吉に任せていた。明治 38 年の山岳会創立時、発起人はそれぞれの知り合いに声をかけて、山岳会への入会を薦めた。1 年間で新潟県から約 100 人の入会者があり、中には著名な政治家、経済界の大物もいて、それらのほとんどは高頭仁兵衛によるものだった。

明治 41 年高頭仁兵衛は小島烏水と白根三山に登った。高頭は田村政七を連れている。小島烏水の『日本アルプス』巻ノ一（明治 43 年、前川文榮閣）の「白根山脈縦斷記」は、その時の紀行文で、「高頭式氏撮影」とする数葉の写真が載っている。田村政七の帽子屋が神田にあると聞いて、訪ねたことがある。「（高頭仁兵衛は）上京すると、いつも真っ先に私の所に来てお茶を飲んだ」「自らは写真機を手にすることはなく、私を学校へ行かせて写真を習わせて、山の写真を撮らせた。経理も勉強させてくれた」という。『日本アルプス』に載る写真は田村政七によるものだったのである。私は高頭仁兵衛についての話を聞くべく、客が少ないと思われる午後 1 時過ぎに訪れたのだが、室内からの「昼食を早く済ませなさいよ」との奥さんの聞こえよがしの声、本音は「帽子を買う気のない客など早く追い返せ」と聞こえ、改めて出直そうと店を出たのだった。しかし、再び訪ねた時には、そこは更地になっていた。山岳会史のためには残念なことだった。

明治 42 年高頭仁兵衛、小島烏水ら山岳会の主要メンバーが悪沢岳に登るべく、南アルプスに入った。その記録が『山岳』第五年第一号の「白根及び赤石山脈縦横記」で、高頭は従者として渡辺権一を連れている。露営の第二夜、西俣の露営地で「高頭は緑茶を抹にして衆に勧められぬ。平生の嗜み思いやられてゆかしかりき」、また第四夜には「高頭は例の嗜みにて一炷の香を焚けり」とある。もちろん、それらは従者に背負わせたものである。赤石岳頂上での写真には、まだ童顔が残る高頭仁兵衛と従者の渡辺権一が写っている。高頭 32 歳、見事な旦那ぶりである。

＋ ＋ ＋ ＋ ＋ ◆ ＋ ＋《ようこそ、ルームへ》＋ ＋ ◆ ＋ ＋ ＋ ＋ ＋

チョウのモニタリング調査

石塚 嘉一

昨年の 6 月から、チョウのモニタリング調査というものをやっている。これは、「日本チョウ類保全協会」が始めたもので、1 年目の昨年は、（私も含めた）会員を中心に全国 32 ヵ所で調査が行われた。チョウ類の保全活動先進国英国の「チョウ類保全協会」が 1970 年代に始めて、いま欧州全体に広がっているものの日本版である。

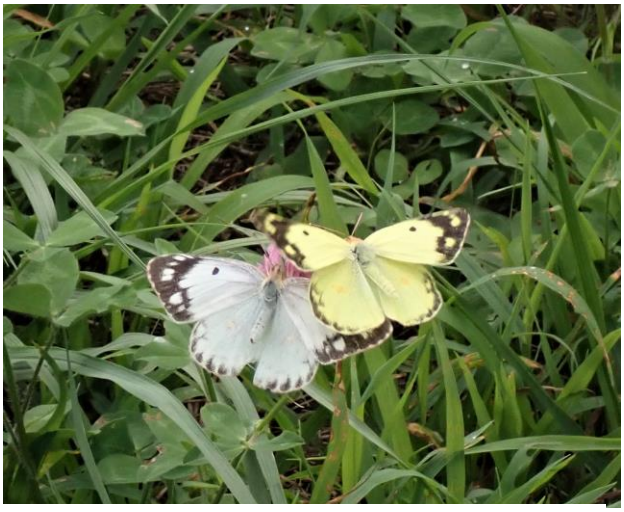
この調査は、2 キロから 3 キロの一定のルートを設定して、5 つぐらいのセクション（「区画」の意味です）に分け、毎週 1 回の調査をするトランセクト調査というもの。できるだけ、チョウの活動が活発な、気温が上がりすぎない午前中に、そのコースを歩いて、セクションごとに、自分の周辺 5 メートルの範囲で飛んでいたりとまっていたりするチョウの種類と数を記録するのである。ルートの設定は、調査する人がしやすい自宅や職場、学校の近くを選ぶ。

私の場合も、小金井市の自宅近く、いつもの散歩兼観察コースが調査ルートである。武蔵野公園を流れる野川べり（セクション 1）を歩いて、そこから野川公園に入り、さらに野川沿い（2）を歩いた先で自然観察園（3）の中を一周、そのあと野川公園の中（4）を抜けて武蔵野公園の樹林の間の道（5）を出発点の武蔵野公園入口に戻る、2 時間半ほどの行程である。昨年は 6 月から始めて 12 月の上旬、寒くなるまで調査は毎週続いた。

このコースは、武蔵野の「はけ」と呼ばれる国分寺崖線が走っていて、湧き水がその南を流れる野川に流れ込んでいる。農家や森も草原もあって、モンシロチョウやモンキチョウがたくさん飛んでいる、都心の公園とはまた違う自然環境だ。野川自然観察園には多様な植物が自然に近い形で保護・管理されているので、このコースの中では山地性のチョウが見られる。

それでも、特別に珍しい絶滅危惧種のチョウがいるわけでもないが、モニタリング調査の目的は、調査地点にはどのチョウがどれぐらいいて、減っているか増えているか、日本各地で、毎年データを集め積み上げることであるから、それなりに重要なのである。チョウは自然環境の指標としてたいへんすぐれていて、チョウの保全だけではなく日本の生物多様性全体の状況がどのように変化しているのかを明らかにするうえでこの調査は非常に重要だと考えられている。

ゴルフ場ができて食草のある草原がなくなり、里山が利用されなくなって樹林の下の食草が育たなくなったとか、樹林の伐採や鹿の食害で荒れ地になり、食草、食樹がなくなったことでチョウの住処がなくなったとか、さらには新しい肥料や農薬の使用、外来種の植物や天敵の侵入など、いろんな原因でチョウの減少につながっているので、チョウの減少から環境の悪化や気候変動の多様性への悪影響などを知ることができる。



アカツメグサで吸蜜するメス（左）に求愛するオスのモンキチョウ

毎週 1 回の調査で、4 月に入ると 10 種類以上、15 種類ぐらいのチョウが、1 種で 1 頭から 10 数頭見つかる。天気が理想的なときは、全部で 1 回に 50 頭を超えるときがある。今年 4 月 21 日は、午前 10 時で晴れ、気温 23.6 度、雲量 20%の好条件で、川べりの水たまりで、アゲハチョウとアオスジアゲハとクロアゲハが、数頭ずつ集団吸水しているのを見つけたのも含め、15 種、91 頭になった。ほとんどは、モンシロチョウ、モンキチョウ、ヤマトシジミなどの普通種であるが、それらより一段希少なチョウがいつも 2-3 種混ざっている。昨年は、8 月後半から 10 月初めまで、1 回の調査で 17-19 種、100 頭以上が見られ、中でも 9 月 10 日の調査では、19 種、総数 204 頭を数えた。（次号に続く）

～～《予告など》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

6 月山行：6 月 30 日の実施で、申し込み締め切りを 25 日としています。この会報がお手元に届く時には締め切りが過ぎていますが、もしご参加希望の場合は、早急に担当の小林さん、石塚さんまでお知らせ願います。（会報 185 号を参照ください）

７月例会：暑気払い

ルームの使用制限はなくなりましたが、飲食は引き続き出来ないとのことですので、暑気払いを昨年と同じ形で開催することといたしました。多くの会員のご出席をお待ちしています。

日時：7 月 15 日（土） 12 時～14 時半

場所：市ヶ谷の中華料理屋「西安（シーアン）」電話 03－5275－5220

会費：3000 円

申し込み先：鳥橋祥子

荒井正人

※7 月 8 日までにご連絡願います。

【お詫び】 4 月会報に同封した名簿に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

・髙橋清輝会員の電話番号：

・近藤雅幸会員のメールアドレス：

・辻橋明子会員のメールアドレス：

※修正版は次号と一緒にお送り致します。

会費納入のお願い：4 月会報でご案内しましたところ、多くの会員よりご入金いただきました。

ありがとうございました。

※今号も別冊を作成しました。別冊については会報 181 号にその主旨を書いていますが、今回もそれに基づいてのものです。いつも読み応えがあることはおわかりだと思います。

--- **編集後記** ---

ピカピカの１年生となった孫にすぐ仲の良い友達が出来て、カブトムシの幼虫を２匹貰って来た。蝶に続いて今度は甲虫だ。腐葉土に埋もれていた幼虫がサナギになり、最近立派な角を持った成虫となった。孫以上に興奮している。まこと自然界は神秘で驚異の世界だと思う。暑い夏ですが元気に過ごしましょう。（荒井正人）

今年は花が早いと言われています。3 月 15 日の会山行『鐘撞堂山』では登山道脇にいくつも咲くカタクリにびっくりしたり、6 月 4 日の高尾山清掃活動では盛りを過ぎたセッコクも目立ちました。この早さに期待して 6 月 30 日の山行ではイワタバコの花に出会えるのではないかと期待しています。（小林敏博）

＜次号予告＞8 月 25 日発行の主な内容） 皆さまからの投稿をお待ちしています

6 月山行報告、暑気払い報告、南川さんの連載❺など